

博士 (文 学) ペトリシェヴァ ニーナ

学 位 論 文 題 名

Discourse Functions of Phatic Interjections in the English, Russian and Japanese Languages 【with special focus on English】

(英語、ロシア語、日本語における交感感動詞の談話機能：

英語を中心として)

学位論文内容の要旨

本論文は交感感動詞 (phatic interjections) の研究である。感動詞とは、会話のなかで他の語彙とは独立して使われ、相手の発話に対する瞬時の判断や話し手の感情的反応などを表す言葉である。交感感動詞とは感動詞のなかでも受け答えや承諾、あいづちなどとりわけ話し手と聞き手の交感的機能にかかわるものを指す。本論は英語の YEAH, SURE, OK, ALL RIGHT, UH-HUH を比較し、さらにロシア語の DA, AGA, NU, HOROSHO、日本語の「はい」「ええ」「うん」「わかった」との比較を行っている。

感動詞についての従来の言語学的研究の多くは一言語の研究であり、まれに比較研究はあっても系統的に近い言語同士の研究がほとんどであった。さらに従来の研究は作例と母語話者の直感に基づく研究が主流であり統計的調査を行った研究は非常に少ない。また先行研究では感動詞の談話標識用法に主な関心が向けられ、発話行為的用法には十分な注意が向けられなかった。本研究の目的は主につぎの三点にある。第一は、英語、ロシア語、日本語それぞれの言語の交感感動詞が果たす談話標識機能と発話行為機能を具体的な会話例に基づき統計的なデータを作ること。第二は、談話標識機能と発話行為機能を隔てる普遍的なメカニズムを明らかにすること。第三は、これら三言語の交感感動詞の共通点と相違点を浮き彫りにすることにある。

本論は、認知言語学の道具立てを利用して Panther & Thornburg が提唱したコミュニケーション・シナリオとメトニミー理論を適用している。言語資料には、3 言語共に小説と映画スクリプトから交感感動詞が含まれる会話を計 1 2 7 2 件集め、これらのデータの観察に基づき一般化を計っている。

第一章は、本論文の研究対象を明らかにしている。従来の感動詞研究では話し手の感情表出機能、談話の構成的機能、そして対人的交感を表す機能に主な関心が向けられていたが、交感感動詞が発話行為においても豊かな機能を有するという仮説を立て、この仮説を三言語において検証する旨を述べている。

第二章では、まず主な先行研究の感動詞の分析を概観しその不備を指摘し、つぎに本論のキーワードである communication scenario (コミュニケーション・シナリオ)、phatic function (交感機能)、discourse marker (談話標識)、および (direct/indirect)

speech act ((直接／間接) 発話行為) を定義している。

第三章では、英語の5つの交感感動詞 YEAH, SURE, OK, ALL RIGHT, UH-HUH の用例を471件集め、シナリオ外的用法(主要機能＝談話標識機能)とシナリオ内的用法(副次的機能＝発話行為機能)に分けて分析している。まず、OKAY, ALL RIGHT, UH-HUH は談話標識の使用頻率が高いが、SURE は主に発話行為に使われることを観察している。談話標識機能では、YEAH と ALL RIGHT がもっとも多様で、あいづち、話題の変換、話し手の交代、状況要約などに使われるが、逆に UH-HUH と SURE は状況要約には使われないこと、OKAY は純粋なあいづちに使われないことなどを報告している。発話行為機能では、YEAH と SURE の使用頻度が高く大部分が断定的行為に使われるが、OKAY と ALL RIGHT は約束的行為のみに使われること、また UH-HUH は断定的行為の中にしか見られないと報告している。

第四章では、ロシア語の4つの交感感動詞 DA, AGA, NU, HOROSHO の使用例を計376件集め、英語と同様の分析を行い、NU と DA は談話標識用法が発話行為用法の3倍頻度が高いことなどを報告している。さらに談話標識用法については NU と DA がもっとも多様で、あいづち、話題の変換、話し手の交代、状況要約だけではなく、会話を切り出したり会話の間を埋めたりするためにも使われること、一方で AGA と HOROSHO は状況要約以外の使用例が稀であることを報告している。発話行為用法では NU の使用頻度が高くて、その大部分は断定的行為であり、続いて使用頻度が高いのは DA, AGA, HOROSHO だが、いずれも約束的行為は稀であり、その大部分が断定的行為に使われていることを報告している。

第五章は、日本語の4つの交感感動詞「はい」「ええ」「うん」「わかった」の使用例を計425件集め同様の分析を行っている。英語、ロシア語と異なり、いずれの感動詞も発話行為用法が談話標識用法の使用頻度を上回り、「うん」「はい」「ええ」「わかった」の順になっている。談話標識用法では、あいづちと話し手の交代が多く、とくに「うん」にこの傾向が強い。一方で「ええ」は話し手の交代の例が多く、「はい」では多様な用法がそれぞれ頻繁に使われ、「わかった」は要約の例が多いと報告している。

発話行為用法では、いずれの感動詞も大部分が断定的行為に使われることと、「うん」の使用頻度が高くて高いことを報告している。コミュニケーション・シナリオの種類については、各交感感動詞により違いがあるが、質問がきわめて多く、続いて命令、情報の授与という結果を述べている。

第六章は、三言語の交感感動詞の比較を行い、まず冒頭で挙げた交感感動詞の談話標識的機能と発話行為機能の違いはコミュニケーション・シナリオの外か中かの違いから生じるという仮説が三言語にあてはまることが確認された一方で、従来の辞書的定義に反する分析結果が出たことをいくつか報告している。

本論が主張する主な結論は以下のようにまとめられる。まず、三言語の交感感動詞はいずれも談話標識機能と発話行為機能を果たす点で共通すること、これがコミュニケーション・シナリオの外と内という視点からそのメカニズムの違いを統一的に説明できること、また各言語間の交感感動詞の用法にはある程度の重なりはあるが不一致もかなりあり、英語、ロシア語、日本語の交感感動詞について新しい記述的事実を明らかにしたことである。OKAY, ALL RIGHT は談話標識で頻繁に使われるが SURE は逆に発話行為の使用頻度が高いこと、一般に英露辞書はロシア語の DA は英語の YEAH に対応すると記述しているが談話機能を見る限り AGA の方が英語の YEAH に対応すること、日本語の「は

い」と「うん」に対応するロシア語は DA よりも AGA である。このような不一致が第二言語修得上の困難を引き起こしている可能性がある。

学位論文審査の要旨

主査	教授	高橋英光
副査	教授	小野芳彦
副査	教授	望月恒子
副査	助教授	野村益寛

学位論文題名

Discourse Functions of Phatic Interjections in the English, Russian and Japanese Languages 【with special focus on English】

(英語、ロシア語、日本語における交感感動詞の談話機能：
英語を中心として)

感動詞はすべての言語に存在するが、本論のテーマである交感感動詞はとくに会話のやりとりには欠かせない表現である。しかしながら従来の言語学では文の内部構造に主な関心が寄せられたため、文の内部構造と直接のつながりを持たない感動詞の研究には十分な注意が払われなかった。このため、まれに感動詞研究があっても一言語内の研究でありデータ数が貧弱であった。さらに、比較研究は非常に限られ系統的に近い言語の比較に片寄っていた。さらに、交感感動詞を類型論的に議論するための共通の理論的枠組みが確立していなかった。

本論は、従来の研究のこれらの弱点を踏まえて、記述的に豊かで理論的に強固な交感感動詞研究の土台を築く試みである。本論の主な成果は次の3点にある。第一は、英語、ロシア語、日本語の交感感動詞について膨大なデータに基づく統計的調査を行い、新しい記述的事実を明らかにしたことである。例えば OKAY, ALL RIGHT は談話標識で頻繁に使われるが SURE は逆に発話行為の使用頻度が高いこと、一般に英露辞書はロシア語の DA は英語の YEAH に対応すると記述しているが談話機能を見る限り AGA の方が英語の YEAH に対応すること、日本語の「はい」と「うん」に対応するロシア語は DA よりも AGA であるという指摘などはいずれも注目に値する。会話例に基づくこのような分析は、辞書や文法書に記載され得ないものであり、外国人学習者に修得の困難な交感感動詞についての新たな理解を与えるものである。第二に、交感感動詞の談話標識機能と発話行為機能のメカニズムの違いを、コミュニケーション・シナリオという平明な原理を使って三言語を統一的に説明したことが挙げられる。つまりコミュニケーション・シナリオの

外なら談話標識機能、内なら発話行為機能という分析である。この理論的枠組みの設定によって、系統的に隔たった三言語の交感感動詞の対照研究を共通の基盤で行うことを可能にしている。第三として、一次的交感感動詞だけではなく、二次的交感感動詞である日本語の「わかった」やロシア語の HOROSHO などにも分析を広げる試みは意欲的であり今後の交感感動詞及び会話研究への新たな道を提示したと言える。

ただ、本研究には不備がないわけではない。ひとつは、各言語の交感感動詞の選定基準がやや恣意的であったことが挙げられる。また、膨大なデータをひとつひとつ丹念に分析・分類したことは大いに評価できる一方で、データ・ソースを小説と映画スクリプトに限ったために2、3の表現については十分なデータが集まらなかった点が惜しまれる。さらに、著者が提案したコミュニケーション・シナリオ・モデルには不必要と見られる重複があり改善の余地が残されている。

しかし、これらの不備はいずれも十分に克服可能であり今後の継続課題とみなせるもので、本論文の学問的意義を損なうものではない。本論は、英語、ロシア語、日本語それぞれの言語の交感感動詞について豊かな統計的資料を提供し、交感感動詞の類型論的研究の新たな手法を提供している。本論が、感動詞研究と会話研究、そして認知言語学の発展に寄与したものはきわめて大きい。

本委員会は、申請論文を慎重に審査し、また口述試験を実施して十分に審議を重ね、全員一致してペトリシェヴァ・ニーナ氏に博士（文学）の学位を授与することが妥当であるとの結論に達した。